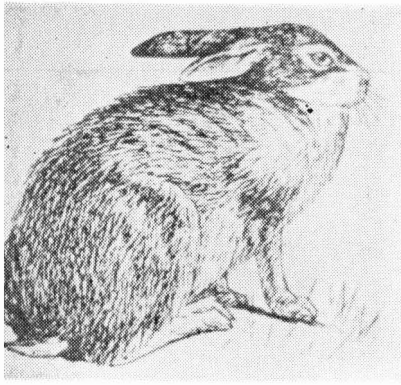


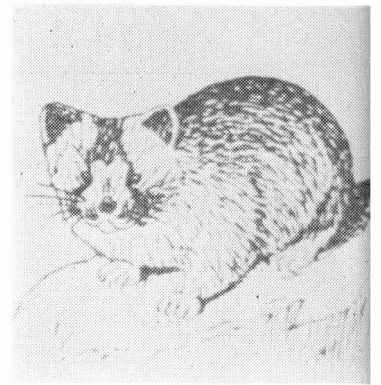
# 琉球大学学術リポジトリ

## ウサギ雑話 一卯年に因んで一

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高良, 鉄夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/20620">http://hdl.handle.net/20.500.12000/20620</a>



ノウサギ



ナキウサギ

# ウサギ雑話

## — 卯年に因んで —

ウサギは家畜として農村の人々によく親しまれている。しかしながら沖縄には野生のウサギはいないので、イエウサギ（家兎）の他はよく知られていない。そこで今年卯年に当るので、ウサギとそれに因んだ名前、諺などを紹介したい。

沖縄の方言でウサギのことをウサジと呼んでいるが、本土ではウサと呼んでいるところがあり、また富山県辺りではウサンと呼んでいる。

ウサギにはいろいろの種類がある。ノウサギ（野兎）は走ることが巧みで1時間約50キロメートルの速さ、カメの0.4キロメートルに比較すると実にすばしこいものである。

イエウサギはノウサギを飼い馴らしたものだと思っている人もあるが、両者は縁の遠いもので、実はイエウサギの先祖はアナウサギという野生ウサギの一種である。即ち地中海沿岸に棲んでいたアナウサギを飼い馴らして改良したものである。日本ノイエウサギは明治のはじめ頃、外国からもたらされたもので、日本の古い時代のウサギの記事はすべてノウサギに関するものである。

アンゴラとか、チンチラとかいうと何のことかはじめてきく人にはわからない。アンゴラと名のつくものにウサギがあり、猫があり、山羊がある。アンゴラというウサギの品種はアンゴラ猫やアンゴラ山羊のように長い毛をもっていることから名づけられたものようであるが、他方トルコのアンゴラ附近で生まれたので、そのように名づけられたという説もある。チンチラウサギはその毛皮がケイトネズミ（チンチラ、ラニゲラ）に似ているところから名づけられたものである。

イエウサギ、ノウサギの他に特に異った形や習性をもったものに、ナキウサギとクロウサギの仲間がある。ナキウサギは体が小さく、テンジクネズミ位の大きさで耳

は小さく尾はない。また前後肢はほぼ同じ長さである。巣の中に食物を貯え、ネズミのような鋭い鳴き声を出す日本では北海道に産する。

アマミのクロウサギは奄美大島と徳之島の特産で、俗にウサギと呼ばれる仲間では最も原始的なものである。黒かつ色乃至灰黒色を呈し、普通のウサギとは著しく外觀が異なり、一見普通のウサギとネズミの子のように見える。深山の樹洞や岩穴の中に棲み世界的珍獣として天然記念物に指定されている。このクロウサギはハブと同棲するといわれており、これについていろいろの説話があるが、事実はハブの餌食になった黒ウサギもある

ウサギは一般におとなしく、容姿可憐である。人によく馴れるが、その反面ものに驚き易い。卯年生れの人は愛きようがあり、人気もあるが、他方遠慮しがちであるといわれているのは、およそウサギの容貌の愛らしさと性質に関係があろう。他人のかくしごとをよく探り出す人をウサギ耳、というたとえがあるが、ウサギの耳は感覚が鋭く、もの音をよく察知することが出来る。

ウサギは繁殖力が強力で、ネズミ算式に計算すると、1カ年後には約80匹に達する。生後8カ月乃至10カ月で繁殖能力があり、1年中繁殖ができる。しかしながら年中繁殖が可能であっても、無理に繁殖を行うと母ウサギが弱体となり、生まれた子ウサギも生育がよくない。妊娠期間約1カ月、1腹5~9匹の子を産む。復活祭の卯はウサギがはこんでくるものとされているのは、ウサギが多産であることに由来するものであろうか。発情は1週間の周期でくるが、その時には排卵されず、交尾した刺激によって約10時間後に排卵されるところに興味がある。従ってメスを1年以上も種つけしないで、そのまま放っておくと卵巣が早く老化する。専門家の話によると近年ホルモン注射その他の刺激によって排卵をうながすことが

出来るようになり、人工授精も可能である。ウサギは一夫多妻の生活で、夜間活動するものであるが、発情期になると、夕方早々から相手を求めて歩きまわる。そして食事も忘れて相手に夢中になり、そのためついに天敵に襲われ、野生の叫びをあげて一生を終るものもいる。卯年生まれの人は色事に苦悩が多いということは、こうしたウサギの性生活と関連つけたものであるかも知れない。

ウサギの繁殖力が強大であることは前に述べておいたが、ウサギが著しくふえたために大損をした人と、同じウサギでぼろいもうけをした人もいる。これは数10年前のできごとであるが、ヨーロッパからオーストラリアに持ち込まれたウサギが著しくふえた結果、オーストラリアの重要物産である羊毛に悪影響を及ぼしたという記事がある。即ち羊に必要な牧草はウサギに横取りされ、そのため羊は従来の半分の頭数しか飼えないようになり、牧場の価値が半減し、たちまち莫大な損害を被った。そこで法律をもうけるなどウサギ駆除にいろいろの方法が講ぜられた。ところが捕獲された数量がものすごく、始末の出来ないままにあちこちに山積して腐敗にまかせた。これを見た抜け目のない者は処置に困っているウサギの肉を試みにヨーロッパに送った。それがよく売れるので捕獲したウサギをびた一文で買い占め、たちまち大金持ちになったということである。これをみてもウサギが如何に繁殖力が大きいかがということがうかがわれる。

沖縄で狩猟資源としてウサギの放飼いを考えている人がいるが、沖縄島では野犬が横行するし、またマングースやハブなどの天敵がいるので、所期の目的を達成することは困難であろう。

ウサギの肉は栄養価が高く、鶏肉に似た風味があるので、あらゆる料理に用いられ、また味にくせがないので加工の場合他の獣肉とまぜてもわかり難い。なお粘着力が強く加工し易いのでハム、ソーセージにまぜて利用される。屠殺の方法が完全であれば、刺身として生のまま食べても美味しいといわれている。古くはヨーロッパではウサギの肉は美と愛をうながすものとされたらしい。

徳川幕府の恒例として元旦にウサギの肉の吸物を食べさせたという記事がある。即ち徳川家康九代の祖、有親

及びその子親代が信濃国の林郷に潜伏していた時、同地の豪族、林藤十郎光政が12月晦日に積雪をおかしてウサギを捕え、翌元日に有親父子の食膳に供した。ところがその年から徳川家が盛運の緒についたので、めでたい記念として用いるようになったものだという。

ウサギの糞はこま切れの粒になっている。庭先や野外でそれをばらまいて平気でピョンピョンはね回っている。後始末をしないことをウサギのひり放しというが、この諺はおよそこの辺りに由来するものであろう。卯年生まれの人がものごとをやり放しにする癖があるといわれているのも、これに由来するものであろう。面白いことにはヨーロッパのノウサギは自分の糞を食べる習性があるが、日本のノウサギはこのような下品なことはしないという。

コウモリ的一种にウサギコウモリという小形のものがいる。これは実にはでっかいハイカラな耳をもっており、その耳の長さは体の長さと同様である。ロバは一名ウサギウマと呼ばれているが、これも体の小さい割に長い耳をもっている。このような呼び名はウサギのように長い耳をもっているところから名づけられたものである。

徳川時代の遊廓の隠語に遊客のことをウサギの異名で呼ばれているが、これは人目をしのぶために手織をかぶった姿が、あたかもウサギのうずくまった可憐な姿に似たところから名づけられたものらしい。しかしながら時と所が変ればものの見方、考え方も異なるもので、ウサギのうずくまっている姿を神の前における祝願者に連想して、これを信迎と結びつけ、あるいは山の主だから朝の中は獲ってはならないなどとウサギを神聖視しているところもある。

ウサギは古くから童話や童謡、その他遊戯などにものされており、因幡の白ウサギの伝説、カチカチ山のウサギの武勇伝、月の中のウサギの餅つき、ウサギとカメの競争、ウサギとびなどは児童によくしたしまれており、ウサギを飼うことは児童の情操教育の一端にもなる。また老幼婦女子をとわず、飼育が容易に出来るので、農家の副業経営上いろいろと利益をもたらすものである。

1月11、13日の琉球新報に掲載されたのであるが、今回更に増補し、再録することにした。(高良鉄夫)